知求会ニュース

2018年04月

第65号

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

THAN THI MY BIN(国際学研究専攻・9期生)さんが、2018年3月23日(金曜日)に昨年授与された張婷婷さんと仲田和正さんに続いて第21号の博士号学位を授与されました。なお、論文要旨などは本号の「博士録44」に掲載されていますので、併せてご一読下さい。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)2名・博士(文学)(名古屋大学) / (筑波大学) / (東北大学)3名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)1名・博士(人文学)(パリ東大学)1名・博士(芸術学)(筑波大学)1名・博士(社会学)(一橋大学)1名・博士(農学)(東京農工大学連合大学院)2名・博士(国際学)(宇都宮大学)14名・博士(経済学)(名古屋市立大学)1名・博士(観光経営学)(慶熙大学校)1名・博士(人間・環境学)(京都大学)1名・博士(学術)(杏林大学) / (筑波大学) / (東京大学) / (一橋大学)4名・博士(国際開発学)(名古屋大学)1名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン)1名の計34名です。

◎ 博士前期課程、修了おめでとうございます！

2018(平成29)年3月23日(金曜日)午後1時10分から5号館A棟4階大会議室にて、2017年度学位記授与式が開催されました。

今回の修了者は、国際社会研究専攻の第18期生の**応惟雅**さん・**大手稔也**さん・**孔凡旭**さん・**嶋田望**さん・**趙経超**さん・**渡邊裕介**さんの6名でした。国際文化研究専攻の第16期生の**王子朔**さん、第17期生の**石川由宇**さん、第18期生の**JERDNAPAPUN CHITCHANOK**さん・**太雪海**さん・**DU JING**さん・**湯鈺茜**さん・**楊静思**さん・**李爽**さんの8名でした。国際交流研究専攻の第13期生の**金麟**さん・**高岩**さん・**澤村眞由美**さん・**SINGKHAO WASINEE**さん・**SUDIP DAHAL**さん・**孫斌**さん・**高階悠輔**さん・**DAO YEN LINH**さん・**晁增艶**さん・**増山貴子**さん・**孟楊**さん・**余想**さん・**駱蓉**さんの13名でした。計27名でした。

◎ 教職員人事異動

市川 裕見子 名誉教授

元・地球文化形成研究講座所属の市川裕見子先生が、3月31日をもって定年退職されました。宇都宮大学には1986年から教養部を含めて22年間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。なお、1月24日(水)12:50~14:20に4号館B棟23教室において、『シェイクスピアの歴史劇—ヘンリー五世』と題した最終講義をされました。

田崎 正憲さん

国際学部事務部事務長の田崎さんが4月1日付で、留学生・国際交流課長として異動されました。田崎さんは国際学部には事務長として3年間在籍されていました。裏方として国際学研究科・国際学部の事務を円滑に、かつ前進的に采配されてこられました。在籍期間中は本当にお疲れ様でした。後任には、工学部事務長であった田代 真一さんが着任されました。

船山 千恵さん

多文化公共圏センターHANDS プロジェクト部門のコーディネーター船山さんが、契約満了につき3月31日で退職されました。後任には金 英花さん(博士後期課程国際学専攻第4期生)が着任されました。

野澤 知美さん

総務係の野澤さんが今年の12月1日付で、財務部経理課経理企画係へ異動されました。後任には、農学部附属農場係の眞澤 彰吾さんが着任されました。

◎ 2月入試合格結果

国際社会研究専攻	一般	0名	・社会人	0名	・外国人	2名	計	2名
国際文化研究専攻	一般	0名	・社会人	0名	・外国人	1名	計	1名
国際交流研究専攻	一般	0名	・社会人	0名	・外国人	7名	・	
					国際交流・国際貢献活動経験者	1名	計	8名
							合計	11名

◎訃報

博士後期課程第2期修了生の蔡佳樹さん(享年44歳)が2017(平成29)年12月28日にご逝去されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

◎放送大学東京文京学習センター面接授業

1. 国際協力論 2018(平成30)年1月6日(土)・7日(日)1時限～4時限

友松篤信先生(国際学部名誉教授)、高橋豊さん(国際学研究科修士課程国際社会研究専攻第1期生)、他

◎宇都宮大学おやまサテライトプラザ市民講座

「東南アジアを対象とした異文化理解とインバウンドによる経済活性化」

宇都宮大学国際学部名誉教授 友松篤信 先生

主催：小山市、宇都宮大学

日程・内容：

第1回 2018(平成30)年1月13日(土) 午後1時30分～45分 開講式
午後1時45分～午後3時45分

「小山市の特徴を活かしたインバウンドについて」

第2回 2018(平成30)年1月27日(土) 午後1時45分～午後3時45分
「マレーシア人に聞く日本での暮らしと子育て」

第3回 2018(平成30)年2月10日(土) 午後1時45分～午後3時45分
「マレーシア人に聞くムスリムの食べ物」

第4回 2018(平成30)年2月24日(土) 午後1時45分～午後3時45分
「マレーシア人に聞くムスリムの信仰」

会場：小山市立生涯学習センター（セミナー室）

小山市中央町3-7-1 ロブレ6階

◎ 平成29年度 第2回 各学部等同窓会連絡協議会報告

2018(平成30)年2月27日(火)午後4時から、宇都宮大学峰ヶ丘講堂にて、平成29年度第2回 各学部等同窓会連絡協議会が開催されました。出席者は藤井佐知子理事・茅野甚治郎理事・久保進理事・伊東明彦 教育学部長・の大学側4名と事務局担当者4名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・松本展壽 教育学部同窓会会長・小林哲夫 同副会長・増淵茂泰 同副会長・竹井誠 同副会長・清水由行 工学部同窓会会長・上澤和彦 同副会長・和賀井睦夫 農学部峰ヶ丘同窓会会長・竹永博 同副会長・杉田昭栄 同理事長の同窓会側11名でした。議事内容は、協議事項として、今後の大学式典における各学部等同窓会連絡協議会来賓挨拶について、2. その他。検討事項として、1. 各学部同窓会の活動報告等について、2. 大学に対する要望等について、3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 掲載記事紹介

1. 朝日新聞 朝刊(平成29年10月30日発行)29面に、「外国籍生徒らの高校進学を支援 宇大で説明会」と題した記事の中で、[小波津ホセ](#)さん(国際交流専攻11期生)のコメントが掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 下野新聞 朝刊(平成29年11月19日発行)3面に、「正造は現代の羅針盤 活動意義、研究者ら報告 宇大図書館がシンポジウム」と題した記事の中で、[高橋若菜](#)先生のコメントが掲載されました。
2. 下野新聞 朝刊(平成29年12月20日発行)4面に、「命より大切な仕事ない 過労死遺族が体験語る 宇大で啓発授業」と題した記事の中で、[大宮希美](#)さん(国際学部4年生)のコメントが掲載されました。

3. 下野新聞 朝刊 (平成 30 年 2 月 10 日発行) 4 面に、「原発事故で宇大シンポ 「低認知被災地」 理解を 県境越えて連携呼び掛け」と題して、[清水奈名子](#)先生らの記事が掲載されました。

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1. スペイン語入門 2018年4月19日 (木) ・26日 (木) 3時限～4時限
2018年5月10日 (木) ・17日 (木) 3時限～4時限
[スエヨシ アナ](#)先生 (国際学部准教授)
2. ことばからみるタイの社会と文化 2018年5月26日 (土) ・27日 (日) 1時限～4時限
[マリー ケオマノーナム](#)先生 (国際学部教授)
3. 戦争と平和をめぐる諸問題 2018年4月21日 (土) ・22日 (日) 1時限～4時限
[清水奈名子](#)先生 (国際学部准教授)
4. 韓国の風土と諸地域 2018年6月23日 (土) ・24日 (日) 1時限～4時限
[佐々木史郎](#)先生 (国際学部名誉教授)
5. ロシアの文化と文学 2018年4月14日 (土) ・15日 (日) 1時限～4時限
[大野斉子](#)先生 (国際学部准教授)

○刊行案内

1. 2017(平成 29)年 3 月 30 日に、[重田康博](#)先生による著書『激動するグローバル市民社会 —「慈善」から「公正」への発展と展開』明石書店、320 頁が刊行されました。

* 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007 年 9 月 20 日に、ニューズレター『HANDS』第 1 号が発行されました。2010 年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第 23 号(2018 年 2 月 7 日)

外国人児童生徒教育推進協議会報告

国際学部附属多文化公共圏センター

センター長 (HANDS 部門代表) [田巻松雄](#)

「多言語による高校進学ガイダンス」開催報告

国際学部附属多文化公共圏センター [船山千恵](#)

諦めないこと

国際学部 1 年 [孟 伶諭](#)

平成 29 年度子ども国際理解サマースクール報告

国際学部附属多文化公共圏センター長 [田巻松雄](#)

フィリピンについての国際理解講座を担当して

国際学部 4年 小野寺まゆみ

シリーズ；学生ボランティア派遣体験記 19

外国人児童支援から教えられたこと

国際学部 1年 春原歩美

AMAUTA 支援を通して感じたこと

国際学部 2年 アギーレ ナルミ

小学校での夏期集団支援 ボランティアに参加した動機と感想

国際学部 3年 佐々木千暁

外国人生徒のための学習支援「小山市学びの教室」を通して

国際学部 1年 丁 美誉

「イヤーエンドパーティ」に参加して

国際学部 3年 菅間 菜月

事務局だより

—平成 29 年度の活動—

—関係機関からのお知らせ— 授業で活用できる！JICA 国際理解教育支援プログラムのご紹介

研究室訪問 49 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

市川裕見子先生に寄稿依頼しましたが、固辞されたため掲載を断念しました。

博士録 44 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

「日本在住ベトナム人の子どもに対するベトナム語教育の可能性

—家庭を中心としたバイリンガル教育の観点から—

THAN THI MY BINH

1. 論文の要旨

本論文の目的は、家庭を中心に学校と地域との連携を視野に入れたベトナム語と日本語のバイリンガル教育の観点から、日本在住ベトナム人の子どもに対するベトナム語教育の実態を中心に分析することである。具体的には家庭、公立小学校及び地域におけるベトナム語教室の実態を明らかにし、親を調査の対象にすることで、ベトナム語の保持に関する意識を考察し、ベトナム人家庭のベトナム語教育の特徴を解明する。さらに、子どもの両言語の会話力と読書力の測定を行い、日越バイリンガル教育の可能性を検討した。

本論文では、6つの章を立て、第1章で分析の枠組みと調査概要を示し、第2章で日本在

住ベトナム人の現在までの系譜を概観した。

第 3 章では日本の公立小学校におけるベトナム語教育は、放課後の学習活動であり、学習者の多様性、児童の学習意欲の低下、保護者への取り組みの難しさ、授業内容の不十分さ、学習プログラム、母語講師の不足などのような問題が顕著であることが明らかになった。一方、これまで、日本の公立小学校は外国人児童に対する母語教育への積極的な取り組みを行っていないと指摘されていたが、本調査でのいずれのベトナム語教室も、母語講師のほかに多くの教職員が関わっていた。しかし、全体的には、学校での使用言語と家庭での使用言語にギャップが生じており、小学校に設置されているベトナム語教室はベトナム語を母語とし思考基盤とするベトナム人児童の生活言語と学習言語の習得を支援するというよりも、ベトナム文化の学習および体験を通して、ベトナム人アイデンティティの確立を支援するという取り組みが見られた。

第 4 章でのベトナム人集住地域におけるベトナム語教育に関する調査結果は、本論文の新規性としての実績である。地域におけるベトナム語教育を大きく見れば、教育目標や学習に関する具体的な計画が未整備である点は改善すべきである。母語講師、保護者および学習者の熱意と努力のもと地域の支援を受けながら前向きに活動している。これらの母語教室の母語講師は一人の子どもに対面し、母語学習にいかに関心を持ち、学ぶ喜びを体験できるか、教材や考え方を様々な工夫を凝らし活動している。ただし、子どもが成長するにつれ、生活全般が日本語一辺倒になると自然と子どもは母語から日本語の使用を優先するようになり、子どもの心の中には母語学習の意義や教室の存在自体に疑問をもつようになることも見られた。こうした困難は母語・継承語学習にとって、当然、乗り越えなければならない過渡的に現れる課題である。

第 5 章では、本論文が中心に据える家庭でのベトナム語教育において、これまでの先行研究などであげられる多言語多文化環境に育つ家庭言語政策の他、ベトナム人家庭に固有の特徴が見られることを示した。全体的に親のベトナム語保持意識が強く様々な学習・教育ストラテジーが見られた。一方、親の学歴、読書習慣や言語能力が子どもの母語学習・教育活動に大きな影響を及ぼすことも分かった。顕著なのは、子どもの言語発達についての理解が不十分なことである。また、バイリンガル教育に関する知識が少なく、会話学習や教育に注目し、読み書き学習や教育に取り組んでいる家庭は少なく、リテラシーとの関わりが非常に弱いことが分かった。ベトナム語の保持の目的は、「家庭の絆」「コミュニケーション」「アイデンティティ」「母語・ベトナム語」「ベトナム文化」などのようなカテゴリーがあげられ、ベトナム語集団への帰属意識が高いことがわかった。

第 6 章でベトナム人の子どもに対してベトナム語と日本語の会話力と読書力を調査した結果は、バイリンガル教育理論に新たな実績として貢献している。バイリンガル会話力の三面評価（OBC: Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children）および対話型読書力評価（DRA: Dialogic Reading Assessment）を基に、ベトナム人児童生徒のためのベトナム語 OBC、語彙カード正誤表（ベトナム語版）を作成したことも意義が大きい。調査対象とした 24 名

は、会話面でベトナム語の発音、イントネーション、内容理解がよくできても、文字を読む時に文字の表記と音声の表記を結び付けることができない子どもが少なくなかった。また、ベトナム語の文法が不自然であり、文法の指導を怠っていると分かった。全体的に、バランスが取れているベトナム語・日本語バイリンガルの兆しと見られたのは24名中4名であるということから、日本在住ベトナム人の子どものベトナム語教育は厳しい状況に置かれていることを明らかにした。

最後に、日越バイリンガル教育は家庭における親の意識向上だけでは難しく、家庭・学校・地域の連携が不可欠であり、日本の教育は外国籍をもつ児童・生徒向けの母語・継承語教育の政策を見直すことが必要であることを示唆した。

2. 感謝

本論文の執筆にあたり、何よりも感謝せねばならないのは、終始温かくご指導を賜りました指導教員の佐々木一隆先生です。論文のタイトルから、論旨の組み立て、日本語修正などに至るまで、佐々木先生の入念なご指導がなくては、本論文の完成は全く不可能であり、ご支援下さいましたことに衷心より厚くお礼申し上げます。

次に、博士後期課程に進学して以来、大変お世話になりました副指導教員のマリー先生、高橋先生に深甚なる謝意を申し上げます。また、本論文の審査及び修正にあたり、大変な面倒をお掛けしました田巻松雄先生に心より厚くお礼申し上げます。本論文の審査をお引き受け下さった湯澤伸夫先生に、厚く感謝の意を申し上げます。学外審査委員である静岡大学の新江俊彦先生からは、深い学識に基づく貴重なご指摘を多くいただき、この場を借りて深謝申し上げます。

3. 後輩への助言

博士論文は博士後期課程の研究仲間及び佐々木ゼミの前期課程、学部生からの多大な協力がなくては、論文の完成は不可能であり、後輩にアドバイスするのは大変恐縮です。また、研究テーマや個人差は大きいと思いますが、以下の私なりのストレートな感想を、参考にしていただくと幸いです。

第1に、早い段階から先行研究を深く広く調べることです。先行研究を探索し、できれば読んだ先行研究を直ぐにまとめて、自分の研究との接点を考慮しフィアルごとに分けて置きます。そして、読んだ先行研究は参考文献としてリストアップするのをお勧めします。こうすると、執筆する時に先行研究のまとめ段階を大分短縮でき、参考文献の整理も軽減できると思います。

第2に、博士論文は修士論文のテーマを続ける場合は1年次の時に修士論文をまとめ、学会誌に投稿すると安心です。修士論文のテーマと異なる場合は、隣地研究を行う前になるべく予備調査を行うのがお勧めです。さらに、予備調査の結果は学会で発表し、学会誌に投稿すると確実です。

第3に、学会発表、第1次発表、第2次発表などでは、多くの先生方々から厳しい指摘・コメントを受けるかもしれませんが、先人の指導を考慮しながら自分の選択を信じて、

前に進めることが大切です。

第4に、博士論文の執筆が終わってもやることが多いです。脱字・誤植、数字の全角と半角の修正、参考文献の整理などは非常に時間がかかります。ですので執筆時に一貫させると楽になります。また、日本語のネイティブスピーカーではない場合は、日本語の校正が必要であるため、日本語校正時間も執筆の計画に入れ、早めに頼れる人に依頼しておくスムーズになります。

第5に、できれば予備論文、本論文の提出日の前日に印刷し、コピーした方が安心です。博士論文は一般に枚数も多いし、提出部数も多いため当日に印刷すると間に合わないです。さらに、提出日に限り印刷機やコピー機はよくトラブルが起こりますので、余裕を持って印刷するのがお勧めです。

以上が私の感想です。この4年間、国際学研究科で研究生活を送ることができて、本当によかったと思っています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(国際学研究科 国際学研究専攻 第9期修了生)

(2018年3月25日原稿受理)

知究人 33 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

「ユートピアと向き合って」

東北大学大学院文学研究科

市川 香菜子

宇都宮大学国際学部国際社会学科卒業生の市川香菜子です。2012年に入学、1年間の交換留学を経て2017年に卒業しました。宇都宮大学国際学部に入學したのは、海外留学できる環境も整い、講義の種類も多様だったため自分の可能性を広げられると感じたからです。実際に宇都宮大学で日々を過ごすうち、英文学に興味をわき、市川裕見子先生の比較文学のゼミに所属しました。また、アメリカに留学中、英文学や翻訳の講義を受けたこともあり、帰国後東北大学大学院文学研究科への進学を考え始めました。

東北大学文学研究科を選んだわけは、通いやすさということもありますが、より専門的な学びを通して自分を高められると思ったからです。在籍している英文学研究室は、社会人を経て入学した方や他大学からの学生も少なくなく、開けた雰囲気があります。日々の講義はもちろんですが、学生主導のイベントも多く、知識や分析力を深める機会に恵まれていると思います。たとえば、詩のオリエンテーションというイベントでは、1つの詩について院生と学部生が韻律や解釈などについてまとめ、発表を行います。また、読書会も定期的にかかれ、対象となっている作品について発表したり、それをもとに議論したりしています。まだまだ知らないことが多く、自分の勉強不足を痛感することばかりです。

現在、私は19世紀イギリスの作家ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』を研究しています。卒業論文でも同じ作家を扱いました。ユートピアというジャンルは、多くの場

合、社会主義が勝ち取られた社会に理想を託し、資本主義が引き起こす貧困や格差、環境破壊などを批判します。小説に描かれたユートピアを新しい社会の青写真と見なすのは危険ですが、それが現代社会にどのような問いを投げかけているのか考えることは価値があります。詩や小説は社会について考えるうえでの糸口のようなものであり、できる限り作品を多角的に捉えるように心掛けています。このような姿勢を得ることができたのは宇都宮大学で政治や経済、哲学などさまざまな学問と向き合ったおかげです。

修士課程を終えた後は、留学で培った英語やユートピアの研究を通して学んだことを活かすべく、新聞記者になろうと考えています。ただ、今は目の前のことに取り組みつつ、研究の質を高めていきたいです。

(国際学部 国際社会学科 第18期卒業生)

(2018年3月20日原稿受理)

「私と研究」

東北大学大学院文学研究科 人間科学専攻 社会学専攻分野

高橋 知花

2017年3月に宇都宮大学国際学部を卒業した、高橋知花です。現在、東北大学大学院で社会学分野を勉強しています。社会学は、社会の構造や、社会の動き、あるいは社会における人と人との関係を紐解く学問です。主にフィールドに出かけ、フィールドから学ぶという手法を取ることが多く、私も頻繁にフィールドに出かけています。社会学と一口に言っても、福祉社会学、地域社会学、理論社会学などさまざまな分野がありますが、私はその中でも環境問題に興味があり、環境社会学という分野を専門に研究しています。私の在学している社会学専攻分野では、それぞれの分野の専門の先生がいます。私の指導教官は環境社会学の先端で研究を進めてこられた先生で、専門的な指導を受けることができます。修士課程一年目は、基本的には社会学に関する基礎的、応用的な授業を履修しつつ、修士論文のテーマについても文献調査や現地調査などの研究を進めました。今年は修士課程二年目となり、本格的に修士論文に取り組む予定です。

宇都宮大学在学時代に書いた卒論のテーマは原発避難でしたが、現在はテーマを変え、里山保全について研究しています。原発問題は研究テーマから遠ざかってしまいましたが、現在も原発避難に関するボランティアに参加するなど、個人的な問題関心として勉強を続けています。里山保全に着手したきっかけは、大学院入学後の勉強の中で、里山の存在が環境保全にとって重要であることを学んだことでした。里山という環境が存在し、守られることは、生物多様性の保全というグローバルな問題にも重要となっています。私が生まれ育った環境も里山のような環境だったため、グローバルな環境問題の解決の糸口が、身近な場所にあることに刺激を受け、より深く研究したいと考えました。里山に住む人々は里山との対話を通して、適切な手入れをし、里山環境を守ってきました。私の研究は、地

域の里山がどのように手入れされてきたかを探った上で、高度経済成長期以降、後退している里山が、現代のニーズに合わせて、どのように維持、保全されるのかを探求するものです。現在は、岩手県遠野市をフィールドに、馬搬による林業を研究しています。

私は現在、研究が楽しく、性に合っていると感じています。今こうして研究の道に進むことができているのは、宇都宮大学での勉強や先生や友達との出会い、また特にゼミでの勉強があったからだと思っています。ゼミでともに卒論を書いた仲間や、指導をしてくださった高橋若菜先生には、本当に感謝しています。これからも私を支えてくれた人々への感謝の気持ちを忘れず、研究を頑張りたいです。

(国際学部 国際社会学科 第19期卒業生)

(2018年3月20日原稿受理)

海外だより 26 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「寧波からのご挨拶」

鄭 楽静

みなさん、こんにちは。宇都宮大学大学院国際学研究科修了生の鄭楽静と申します。私は2012年から中国の寧波大学で専任講師として働いています。今日は寧波大学についてご紹介させていただきたいと思います。

寧波大学について

寧波は浙江省の東側に位置しています。古くから日本と深く交流し続けています。近代寧波商人は上海、香港及び海外へ渡り、故郷と移住先へ多大な貢献をした。彼らは「寧波幫」と呼ばれています。そのうちの一人、世界船王である包玉剛は巨資を寄付し、1986年に寧波大学を創設しました。その後、世界の「寧波幫」から続々支援を受け、寧波大学が目覚ましい発展を遂げました。2017年に中国「双一流」(世界一流大学・一流学科、そのうち世界一流大学建設の対象となるのは42校、世界一流学科建设の対象となるのは95校)建設大学に選ばれました。寧波大学のキャンパスを歩いていると、よく「李達三外語楼」や「曹光彪信息楼」などの寄付者の名前を付いた建物に出会います。

寧波大学は総合的な大学として、21の学部を持っています。在学している学部生は16,298人、研究生は6,719人、留学生は2,615人、高等学歴継続教育の学生は15,476人に達しています。教職員は約2,720人です。

外国語学院について

私は外国語学院の日本語科に所属しています。外国語学院には英語科、日本語科、ドイツ語科があります。それに「理論言語学研究所」や「日本研究所」など7つの研究所を設置し、多彩な学問分野の研究を推進しています。

そのうち、日本語科は1994年に創立されました。2005年から大学院を設置しました。日本語科は毎年学部生約60人と大学院生6~7人を受け入れています。学部生は一、二年

の時、主に「総合日本語」、「日本語会話」、「日本語文法」などの基礎日本語を履修します。三、四年の時、「日本概況」、「日本古典文法」、「日本語言語論」など専門的な知識を学習します。

寧波大学は現在宇都宮大学、岩手大学、広島大学、東京外国語大学など日本の大学と姉妹校を締結し、毎年、優秀な三年生 10 名余りを選び、交換留学生として日本の大学で留学させています。

今、寧波大学でも桜が満開です。遠い寧波から皆さんのご健康とご活躍を心からお祈りします。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第 8 期修了生)

(2018 年 3 月 26 日原稿受理)

海外留学今昔 22 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「韓国留学体験」

渡辺 直華

2016 年 8 月から約半年間、韓国全州にある全北大学校に留学しました。全州は三国時代に都として栄えた都市で、現在でも歴史的な建物や文化が街中に残る場所として有名な地域であったため、以前より関心のあった韓国の思想や伝統文化を学ぶには十分すぎる環境でした。また、全北大学校は全羅북도最大規模の国立大学であるため、校内には数多くの学科棟だけでなく、アイドルがコンサートを開催する広い運動場やジム、毎日散歩しても飽きない程広い美しいキャンパスやカフェといった学生のための施設が幾つも併設されており、生活するにあたり不便を感じることはほぼ無く、毎日校内を歩くのが楽しかった思い出があります。

私は半年間の短期留学だったため、履修授業は語学堂での韓国語の講義に絞り、学科講義は聴講という形で参加することで韓国語能力の向上に努めました。語学堂では分野ごとに様々な場面を想定した韓国語を学び、そのほとんどがグループワークで進められました。私のクラスには 6 ヶ国の学生がおり、皆仲が良かったため和気藹々と課題に取り組むことができましたが、授業が進み、韓国語能力だけでなく問題に対する思考力や表現力を求められる機会が多くなり自主的な活動が増えたことで、今までは気づかなかった考え方やものの見方があることを学びました。そのため半年という短い時間で少しでも多くのことを学ぼうと思い以前よりも積極的に授業に参加したことで、語学力に加え自主性や文化の多様性なども身につけることができました。

授業以外の時間はどの時間を思い出しても「楽しかった」という記憶しかありません。平日は授業が午後からだったため午前中は友人と朝食をとり季節ごとに風景が変わる広い

校内を散歩し、授業後は大学路で買い物や夕食をとり寮で遅くまで語りつつ夜を明かす。休日には観光地として有名な伝統家屋が建ち並ぶ全州韓屋村で伝統食や伝統遊びを体験し、長期休暇には国内旅行へ行き友人と様々な体験や思い出を共有しました。毎日沢山のひと出会い様々な場所に出かけたことで、実用的な韓国語も身につけ、留学開始直後には拙い韓国語のせいで困惑してばかりだった買い物や通販、公共機関での対応も今では楽しいと思うようになりました。韓国で出会った友人とは時間にしてほんの数ヶ月の間共に生活しただけでしたが、常にお互いを気にかけて沢山の時間を共有したことで皆が互いを家族と言い合えるようなかけがえのない関係を築くことができました。彼らとの出会いや思い出は、私の人生において絶対に欠かすことのできない重要な時間となりました。

私にとってこの留学は毎日が刺激的で、考え方や振る舞いまで私という人間を変える良いきっかけになったと感じます。半年間で学び感じたことを忘れず残りの学校生活でも目標を持ち後悔しないよう過ごして行きたいと思います。最後に、留学を支えて下さった宇都宮大学国際交流課及び全北大学校の先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(国際学部 国際文化学科 第20期卒業生)

(2017年8月21日原稿受理)

「チェコ留学体験記」

梅津 杏菜

「チェコってどこだ?」「チェコスロバキア?」一留学前も留学後も、留学先がチェコであるとお伝えする度、周りの方からはこのような反応をいただきました。皆さんは、チェコという国をご存知でしょうか。宇都宮大学には、毎年チェコから交換留学生在が来ているので、チェコに親しみを持つ方もいるかもしれませんが、馴染みの薄い国だと感じる方も多いのではないのでしょうか。チェコは、中央ヨーロッパに位置しており、音楽や芸術などの文化で溢れる、ヨーロッパ中世の街並みを色濃く残す美しい国です。チェコを話題にする時は、首都プラハはご存知ですか?とお話する方が、イメージがしやすいかもしれません。

私がチェコを第一希望の留学先として選んだ理由は、このようなヨーロッパの魅力や歴史を感じる国である一方で、日本では未だ馴染みの薄い、情報量が少ない国であるという点にありました。また、ヨーロッパと言っても、日本人に比較的馴染みのある西欧ではなく、1999年まではソ連の支配下であった歴史を持つ社会主義圏の中東欧諸国の発展や現在の状況にも関心がありました。確かに、留学前は不安を覚えることもありましたが、馴染みが薄かった国での生活だからこそ、全てが新鮮であり、留学生という比較的自由的な立場で先入観を持たずに就学できたことがとても良かったと思っています。

私の留学先であるチェコ国立パラツキー大学は、1573年に設立されたチェコで2番目に長い歴史を持つ総合大学で、チェコの東部オロモウツ市に位置し、ヨーロッパをはじめ、

世界中から集まった留学生が多数在学しています。また、オロモウツ市中心部には、世界遺産認定を受けた聖三位一体柱のある広場があり、普段から市民の憩いの場、催事の場となっていますが、私はそのような歴史ある市街地を日々の通学路とし、チェコの学生に限らず各国の学生と交友関係を築きながら講義を受けられたことが大変貴重な経験だったと改めて感じています。私は一年間の留学でチェコの歴史や文化、芸術、言語に関する講義を中心に履修することができ、履修科目は帰国後に単位変換申請を行い、本学の履修単位として認定をいただきました。特にチェコ語の講義に関しては、日本ではなかなか習う機会がない言葉であるがゆえに、学習できること自体が貴重で、新鮮な喜びもあり、難しくもとても有意義な時間でした。

また、パラツキー大学には留学生をサポートする ESN という、宇都宮大学でいう留学生アドバイザーのような組織があり、その課外活動の一環として、地元の幼稚園での子どもたちとの交流活動や、動物園での清掃活動などにも参加し、大学の講義以外でも充実した諸活動に参加することもできました。また、ESN の主催旅行として、隣国のポーランドのアウシュビッツ強制収容所などにも直接足を運び、戦時中の建物や遺品、現場の空気に直に触れました。高校時代までは、教科書や本などの紙面で世界の歴史を勉強してきましたが、自らが直接その場に赴くことで、今まで感じたことのない想いや新たな関心を持つきっかけともなり、今後の更なる学習意欲ともなりました。

このような経験から、私は、チェコという大変魅力的な国に留学できたこと、また本学からの交換留学という形で留学できたことを大変嬉しく思っており、これから交換留学を希望される後輩の皆様にも、ぜひ充実した留学生活を送っていただきたいと思っています。最後に、留学をサポートして下さった本学関係者の皆様、先生方、そして先輩・友人はもちろん、派遣先であるパラツキー大学の関係者の皆様にも心から感謝の意を表し、私の留学体験記とさせていただきます。この度は大変貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

(国際学部 国際文化学科 第 19 期卒業生)

(2017 年 8 月 20 日原稿受理)

学生サロン 13 知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「Table For Two 宇都宮」

向後 優太

こんにちは、Table For Two 宇都宮です。今回、幸いながら掲載の機会をいただきましたので私たちの活動について少し書かせていただきたいと思います。私たちは Table For Two (通称 TFT) というコンセプトに基づき、世界の食の不均衡を是正するべく活動をおこなっています。現在、世界には約 10 億人が飢餓に苦しむ一方で約 20 億人が栄養過

多による肥満状態にあります。この不均衡の解消を目的としています。具体的には、肥満に苦しむ先進国の人々に対してヘルシーなメニューを考案、TFTメニューとして提供し、その食事の金額に含まれるうちの20円をアジアやアフリカの子供たちの給食費として届ける活動をしています。20円というのは、それらアジア・アフリカ諸国の給食おおよそ一食分の金額です。つまり、ヘルシーなTFTメニューを一食食べていただく毎に、子供たちの給食が一食届くという仕組みになっているわけです。この先進諸国と後発開発途上国の食事を通したつながりこそが、Table For Two（直訳すると“二人のための食卓”）の所以になっているのです。肥満と飢餓に苦しむ二人が、時間と空間を超えてつながるのです。

私たちの活動は俗に「国際協力」と称されますが、着目すべき点は先進諸国と後発開発途上国とがWin-Winの関係にある点です。前者から後者への一方的な支援ではなく、お互いに健康をもたらす活動であるのです。さらに、給食が届けられることによって子供たちが学校へ通わせてもらえるようになり、教育が普及するというメリットもあります。その教育の普及は、ゆくゆくは国の発展へとつながるのです。

Table For Twoは創設から10年を迎え、活動の幅を広げつつありますが、課題は多く残ります。ひとつは、食数の絶対的な不足です。食数が足りずに学校の全員に給食を届けられない場合もあります。そのような時はメジャーを使い子供たちの上腕の直径を測り、細かい子から順に給食を与えます。そうした状況の中でも、子供たちは不平一つ言わずに素直に譲り合っていると聞きます。解決すべき最重要課題のひとつです。そのほか、給食費用の高騰も課題です。支援国のひとつ、フィリピンなどでは、一食にかかる費用が20円ではまかないきれなくなっています。こうした問題も前述の問題に拍車をかけています。

私たちは、まずTable For Twoの仕組みを知っていただくことが何より大切であると考えます。そして、「食べる」という日常的な行為の中にこうした可能性が秘められていることを認知していただけたら幸いです。

（農学部 生物資源科学科 第3年次在学学生）

（2017年12月27日原稿受理）

キャリア指南12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2018年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）

「日本で子育て」

皆さん、こんにちは！

宇都宮大学大学院 国際学研究科 国際社会研究専攻を2006年3月に修了しました韓国の

韓相榮(ハン・サンヨン)です。指導教官は北島名誉教授で大変お世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

私が日本に来るときは妻と2歳の娘と3人でしたが、その後日本で息子が生まれ今では4人家族になりました。私の娘が小学校に入る時、先生から「娘さんが韓国人であることをクラスの子供たちに言ってもいいですか？それとも言わないほうがいいですか？」と聞かれた時は、なぜ先生がそのような質問をするのかが理解できませんでしたが、後に学校内でのいじめなどの問題から私たちに確認したのだと分かりました。その時私たちはこの日本の中で堂々と韓国人として生活することを決め、私は娘の学校に行くクラスとの友達がいなくても韓国語で娘に話しかけました。その当時娘はそれがいやだったのかもしれませんが、親には何も言いませんでした。後で娘に聞いた話によると娘の友達は、私は日本語が話せないと思われていたようです。

娘は幸い大きいいじめなどもなく学校に通うことが出来ました。その後2013年頃東京新大久保あたりではヘイトスピーチなどで多くの在日韓国人が被害を受ける中、下の息子が学校に入る事になり、私たちはまた選択をしなければなりません。息子が韓国人であることを…勿論私たち夫婦は息子を娘の時と同じく韓国人であることを是非クラスの皆に知らせてくださいとお願いしました。私が息子の学校へ行き韓国語で息子に話をかけると皆興味を持ち、「それ韓国語？何の意味？などと話をかけてくれました。韓国語でこんにちは何と言ってみて。」等要請をする子もいました。娘の時と時代が大分変わってきたなと思いました。娘の時は名前がいじめられて泣いて帰ってきた事もありましたが、息子は学校の中で「ビッグバンの誰誰に似ている。」という噂がながれ、わざわざうちの子を見にクラスまで来る子がいるくらいでした。「ビッグバンが好きで一人で韓国語を勉強しています」と言いながら自分が知っている韓国語で話しかけてくる女の子もいました。本当に韓流ブームであると実感しました。その後、伸び伸びと成長し、息子が小学6年生の時の運動会での事でした。学生代表で選手宣誓をすることになりました。学校関係者以外の来賓等も来る運動会で外国人の子がしかも外国の名前でみんなの前で選手宣誓をするとは思っても出来ませんでした。

親の私は涙が出るくらい嬉しかったです。息子はみんなの前で大きな声で堂々と選手宣誓を言って最後に選手代表「ハン・ジュンヒョク」と名前までとても立派に出来ました。周りで見ている人々が「あの子誰？とても上手だね！」と言うのが聞こえたときは「私の子です」と答えたかったです。遠慮しておきました。これは、私が敏感に考えているかもしれませんが、この事は日本がグローバル社会になったなと実感する出来事でした。これからも日本で仕事も子育ても頑張りたいと思いますので、皆様どうぞ宜しくお願い申し上げます。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第5期修了生)

(2018年3月5日原稿受理)

国際学部学位授与式から

2013(平成25)年度より、学位記授与式において卒業論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

国際学部

・総代1名

- ① 丸田裕稀「原爆投下と核戦略から見る現代中国の歴史認識」松村研究室

・優秀賞7名

- ① 小倉 涼「東日本大震災における震災遺稿に関する一考察—負の遺産やダークツーリズムの視点から」阪本研究室
- ② 緑川沙知「災害時に露呈した高齢者・障害者の生の危うさ—社会構造の縮図となる避難所からみる“強制社会”とは—」立花研究室
- ③ 田邊 翔「EU のリスク・ガバナンス—1015 年以降の難民危機を事例に—」清水奈名子研究室
- ④ 椎名毬子「フラッパーとジャズ・エージ」大野研究室
- ⑤ 小向加奈「台湾における布袋戲のもつ位置—戒厳令解除後の本土文化イメージの創造—」松金研究室
- ⑥ 島津爽穂「延年を担う—『安久津延年』の延命に奔走する人々」古村研究室
- ⑦ 穂高衣美香「アメリカの同性愛映画の変遷」米山研究室

国際学研究科学学位授与式から

2013(平成 25)年度より、学位記授与式において修士論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・学生賞 (奨励奨学金授与) 1 名

- ① 増山貴子「フィリピンの児童養護の実態と課題—シェルターケア施設「HAVEN」を事例として—」田巻研究室

・最優秀賞 1 名

- ① Du Jing “Japanese Womens Education and the Discourse of Ryosai Kenbo : From the End of the 19th Century to the Beginning of 20th Century” モリソン研究室

・優秀賞 1 名

- ① Sudip Dahal “ Role of Community Based Organization on Nepalese Rural Development from the View Point of Empowerment-From Case Study of Asapuri Mahadev CommunityGroup in Sindhupalchok District” 重田研究室

●お願い—宇都宮大学3C基金への寄付に関して

4月に大学から「宇都宮大学3C基金」寄付への協力要請を受けています。詳細は以下のアドレスへアクセスしてください。http://www.utsunomiya-u.ac.jp/fund/3c_kikin.php
なお、海外からでも寄付ができる方法がありますので、よろしくお願いいたします。

2017(平成29)年4月1日から2018(平成30)年1月31日までの寄付状況は以下の通りです。国際学部 7件・教育学部 130件・工学部 85件・農学部 380件・不明 7件の609件です。このデータが示すように、国際学部同窓会・国際学研究科同窓会からの同窓生による関心が薄いように思われます。この機会に、ぜひご協力を重ねてお願いします。

New

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。第3号の主な内容は以下の通りです。1. 新年会@バンコク 2. スジンダ先生ご退官 感謝の会開催@バンコク 3. 同窓生インタビューリレー 4. タイの昨今 連載コラム No.3 初めての日本語能力コンテスト
東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていただくことを祈念しています。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の25号の内容は、1 イタリア アリタリア航空とANA共同運航で提携 2 EU支部だより —イタリアの春—です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●最近、修了生とメールでの連絡が途絶えがちです。アドレス変更の際はご一報ください。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@freeml.com